



Title	1906年総選挙における自由党の再生と労働党：2人区の得票分析
Author(s)	岡田, 新
Citation	大阪外国語大学英米研究. 2007, 31, p. 1-31
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/99309
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

1906年総選挙における自由党の再生と労働党

－2人区の得票分析－

岡 田 新

I はじめに

自由貿易を最大の争点とした1906年総選挙は、低迷を続けていた自由党に歴史的大勝利をもたらした。しかし補欠選挙の結果からみると、保守党と自由統一党の党勢は、1903年に始まったジョゼフ・チェンバレン（Joseph Chamberlain）の関税改革キャンペーン以前から衰退をみせ始めていた。自由党の勢いは、労働者や非国教徒の多い選挙区で上げ潮に向かっており、労働党も自由党以上に逞しい前進をみせていた。勢いを駆った自由党と労働党は、1906年総選挙で積極的に攻勢に転じて、大量の候補者を擁立した。保守党・自由統一党的陣営は、世紀末に享受してきた無投票当選者を失い大きな打撃を受けた。1人区では激増した保守党・自由統一党と自由党との一騎打ちで自由党が圧勝を收め、2人区では、自由党と労働党の選挙協力で、保守党議員の多くが議席から叩き落された。一方労働党は、単なる自由党の協力者にとどまらず、1人区の三つ巴戦でも議席を手にする力を發揮し、2人区でも自由党を押しのけて議席を手にする勢いを示した⁽¹⁾。

本稿では、こうした獲得議席の考察を前提に、2人区における得票の変動を対象として、1906年総選挙で自由党が勝ち取った大勝利の基盤についてさらに分析を深めたい。

第3次選挙法改正後の選挙制度では、2人区では有権者は2票を持ってい

1906年総選挙における自由党の再生と労働党

表1 2人区の1900年選挙と1906年選挙における政党の対決パターン

1906年						
1900年	政党の対決類型	自由党保守党	自由党労働党	自由党保守党労働党	その他	無投票
	自由党保守党	Bath Devonport Ipswich Oldham Plymouth		Newcastle Stockport Dundee	Northampton. Portsmouth Southampton	
	自由党労働党		Merthyr Tydfil			
	保守党労働党			Blackburn Preston		
	自由党保守党労働党	Derby		Halifax Leicester Sunderland		
	その他	Brighton			Cambridge U.	
	無投票			Bolton Norwich York		City of London Oxford U.

注記

- (1) F.W.S.Craig ed., *British Parliamentary Election Results 1885-1918* より集計。
- (2) 対象はイングランド、ウェールズ、スコットランドの2人区。
- (3) 「保守党」には、保守党と自由統一党をまとめて掲出している。「自由党」には、自由党の労働者候補 (Lib/Lab) を含む。
- (4) 「その他」は、社会民主連盟など他の政党の候補が立候補した場合を示す。

た。有権者は2票を特定の候補者にまとめて投じることも（単独票 Plumper）、別々の候補者に分けて投じる（組み票 Splits）こともできた。幸いなことに、かなりの数の2人区について、各候補が獲得した単独票と組み票の票数の記録が残されている。このデータは、1人区の選挙結果からは得がたい各政党の支持者の投票行動を物語る貴重な資料となっている⁽²⁾。

1900年選挙と1906年選挙における2人区の政党の対決の様相は、表1に掲出したように分類することができる。保守党（および自由統一党）、自由党、

労働党の主要政党以外の候補が立候補した選挙区（「その他」として掲出）と、無投票の選挙区については、1900年選挙と1906年選挙の得票を比較することが出来ないため、さしあたり本稿での分析の対象からは除くことにしたい。本稿では、主要政党が対決したそれ以外の15の2人区を対象として、政党の対決パターンごとに、6年を隔てた2つの総選挙における得票の変動を分析することとしたい。

II 保守党と自由党、自由党と労働党の対決

（1）保守党と自由党の対決

まず1900年と1906年と双方の総選挙で、保守党（ないし自由統一党）と自由党が対決した5つの2人区における自由党の得票率を観察してみよう。

表2から明らかなように、この5つの選挙区では、自由党は5.5%から14.1%と平均9.7%も得票率を伸ばした。こうした選挙区では、政党の対決の構図には変化がなかったから、得票率の変動は、もっぱら自由貿易という1906

表2 1900年選挙と1906年選挙の双方で保守党（自由統一党）と自由党が対決した2人区の自由党得票率（%）

選挙区	1900年	1906年	差
Bath	42.7%	56.8%	+ 14.1%
Devonport	51.1%	56.6%	+ 5.5%
Ipswich	50.3%	59.0%	+ 8.7%
Oldham	50.2%	59.3%	+ 9.1%
Plymouth	47.2%	58.4%	+ 11.2%
平均	48.3%	58.0%	+ 9.7%

注 記

- (1) F.W.S.Craig ed., *British Parliamentary Election Results 1885-1918* より集計。
- (2) 自由党には、自由党の労働者候補（Lib/Lab）を含む。

1906年総選挙における自由党の再生と労働党

表3 1900年選挙と1906年選挙で保守党（自由統一党）と自由党が
対決した2人区における自由党票の内訳

選挙区	1900年				1906年			
	単独票	自由 ／保守	自由 ／自由	計	単独票	自由 ／保守	自由 ／自由	計
Bath	35 (0.7%)	113 (2.2%)	5006 (97.1%)	5154	39 (0.5%)	74 (0.9%)	8058 (98.6%)	8171
Devonport	N.A.	N.A.	N.A.	N.A.	237 (1.8%)	307 (2.3%)	12906 (96.0%)	13450
Ipswich	120 (1.4%)	500 (5.7%)	8220 (93.0%)	8840	75 (0.6%)	375 (3.0%)	12236 (96.5%)	12686
Oldham	130 (0.5%)	306 (1.2%)	25240 (98.3%)	25676	217 (0.6%)	1190 (3.5%)	32662 (95.9%)	34069
Plymouth	119 (1.1%)	247 (2.3%)	10358 (96.9%)	10724	134 (0.7%)	309 (1.7%)	17492 (97.5%)	17935
平均(%)	0.8%	2.3%	96.9%		0.8%	2.6%	96.6%	

注記

- (1) F.W.S.Craig ed., *British Parliamentary Election Results 1885-1918* より集計。
- (2) 「保守」には自由統一党を含む。「自由」には、自由党の労働者候補 (Lib/Lab) を含む。
- (3) 単独票は、候補者に単独票として投じられた票の合計。
- (4) 自由／自由は自由党候補の組み票、自由／保守は自由党候補と保守党候補ないし自由党候補と自由統一党候補の組み票の合計を示す。
- (5) () 内は、各選挙における候補の総得票に占める比率を示す。
- (6) N.A はデータがないことを示す。

年総選挙の争点によってもたらされたものと考えることができる。

2票制の記録を基に、この5つの選挙区における票の行方を分析すると、表3が示すように、自由党候補と保守党候補の票の重なりは、いずれの選挙でも極めて小さかったことが分かる。自由党の候補2人の組み票は、1900年選挙でも1906年選挙でも、自由党の得票全体の97%に達している。自由党と保守党とをペアにした投票は、1900年ではわずかに2.3%、1906年でも2.6%

に過ぎない。このデータから、いずれの選挙においても、保守党と自由党の支持層は燁然と分かれていたことが伺える。

(2) 三つ巴戦から保守党・自由党の対決へダービー

保守陣営に対する自由党と労働党支持者の強い結束を示す興味深い事例としては、1900年選挙で自由党、保守党、労働党が三つ巴で争い、1906年には、保守と自由の正面対決となったダービー選挙区があげられる。この選挙区では、1900年には労働党からベル (Bell)、自由党からロー (Roe)、保守党からベムローズ (Bemrose) とドレイジ (Drage) が立候補した。1906年には、労働党のベルが自由党に鞍替えしてローとともに自由党から立ち、保守党はホルフォード (Holford) とスペンサー・チャーチル (Spenser-Churchill) を擁立した。1900年選挙で労働党から立候補していたベルが、1906年選挙では、リブ・ラブ (Lib-Lab) とよばれる自由党の労働者候補として立候補したため、ダービーでは、1900年の三つ巴戦から1906年の自由一保守の一騎打ちへという変則的な事態が生じたのである。

表4 1900年選挙では保守党・自由党・労働党が争い
1906年選挙では保守党と自由党が対決した選挙区の政党別得票

選挙区	1900年			1906年		
	政 党	得 票	得票率	政 党	得 票	得票率
Derby	保守党（2人）	14172	47.8%	保守党（2人）	12830	38.4%
	自由党	7922	26.6%	自由党（2人）	20600	61.6%
	労働党	7640	25.7%			

注 記

- (1) F.W.S.Craig ed., *British Parliamentary Election Results 1885-1918* より集計。
- (2) 保守党（2人）は、保守党2候補の合計、自由党（2人）は自由党2候補の合計を示す。
- (3) 自由党には、自由党の労働者候補 (Lib/Lab) を含む。

1906年総選挙における自由党の再生と労働党

表4が示すように、ダービーの場合、1900年選挙で自由党と労働党に票を投じた有権者は、1906年選挙では、ほぼ一致して自由党の2候補に票を投じ、その上で自由党はさらに10%近くも票を伸ばした。1900年に労働党候補ベルに票を投じた有権者も、自由党の候補ロー（Roe）に投票した有権者も、ともに6年後の選挙で自由党に鞍替えしたベルに積極的に票を投じた事は注目に値する。

2票制の記録をもとにして、この選挙区での票の行方をさらに細かく分析してみよう。表5が示すように、2票制の記録によれば、実は1900年選挙でも、労働党のベル候補が集めた票のうち、労働党ベル候補に単独で投票した票は、驚くべきことにそもそもベル候補の獲得した票のうちのわずか4.7%に過ぎなかった。つまり1900年の選挙の段階で、すでに、労働党ベル候補に投じられた票の91.1%は、自由党候補ローとの組み票だったのである。ただし1900年選挙では、労働党のベルの票のうち、保守党候補ベムローズあるいはドレイジとの組み票も4.2%を占めていたことに注意が必要である。

これに対して1906年選挙でベルが労働党から自由党に鞍替えして出馬した時には、自由党のもう1人の候補ローとの組み票の比率は、4ポイント余り上昇して95.1%となった。その一方、ベルへの単独票は1.7ポイント低下して

表5 1900年選挙と1906年選挙、ダービー選挙区ベル候補の得票

年	政 党	単独票	労働 ／自由	労働 ／保守	自由 ／自由	自由 ／保守	総得票
1900	労働党	357 (4.7%)	6961 (91.1%)	322 (4.2%)			7640
1906	自由党	308 (3.0%)			9857 (95.1%)	196 (1.8%)	10361

注 記

- (1) F.W.S.Craig ed., *British Parliamentary Election Results 1885-1918* より集計。
- (2) 単独票は、候補者に単独票として投じられた票の合計。
- (3) 労働／自由は労働党と自由党候補の組み票、労働／保守は労働党候補と保守党候補の組み票、自由／自由は自由党候補の組み票、自由／保守は自由党と保守党候補の組み票の合計を示す。
- (4) () 内は、各選挙における総得票に占める比率を示す。

3.0%となり、保守党候補ホルフォード、スペンサーチャーチルとベルとの組み票も、4.2%から1.8%にまで低下した。これは、1906年選挙では労働党の支持層と自由党の支持層が一層結束を固めたことを物語っている。

従ってダービーについてみれば、自由党と労働党が一人ずつ候補を出していた1900年選挙の時点で、すでに自由党と労働党の支持層は密接に重なっていたと言わねばならない。そして1906年選挙では、前の選挙で労働党候補を支持した有権者は、自由党に鞍替えした候補にこぞって投票し、前の選挙で労働党と保守党とに組み票で投票していた数少ない有権者も自由党のペアの支持に回り、労働党と自由党の支持層は一層緊密に結束して保守陣営に対抗したのであった⁽³⁾。

(3) 自由党と労働党—マーサ・ティディフィル

しかし労働党と自由党の支持層の密接な関係は、候補者が労働党から自由党に鞍替えしたダービーのような特殊な場合だけではなかった。ウェールズのマーサ・ティディフィル選挙区では、1900年も1906年も、自由党2候補と労働党1候補が対決した。労働党の候補は、労働党の創設者ケア・ハーディー(Keir Hardie)である。いずれの選挙でもハーディーは、かろうじて自由党の一人の候補を押しのけて労働党の議席を守った。しかし2票の行方を分析すると、独立した労働者の政治勢力の結集を課題とし、クロス・キャップで議会に登院して物議をかもしたケア・ハーディーですら、その支持者は自由党の支持者とかなりの程度重なっていたことが分かる。

表6をみると、マーサ・ティディフィル選挙区における自由党と労働党の得票率は、全体としては1900年と1906年で大きく変わらなかったことが分かる。いずれの選挙でも労働党が3割、自由党が7割弱の票を集めた。だからもし自由党がうまく7割の票を分ければ、自由党は候補を2人とも当選させることができる力をもっていた。逆に労働党の票は、3分の1にも届かなかつたから、労働党の支持者が労働党候補を確実に当選させようとすれば、自由

1906年総選挙における自由党の再生と労働党

表6 1900年選挙と1906年選挙双方で自由党と労働党が対決した選挙区における政党別得票

選挙区	1900年			1906年			得票率の変動
	政党	得票	得票率	政党	得票	得票率	
Merthyr Tydfil	自由党 (2人)	12602	68.7%	自由党 (2人)	21747	68.1%	-0.6%
	労働党	5745	31.3%	労働党	10187	31.9%	+0.6%

注記

- (1) F.W.S.Craig ed., *British Parliamentary Election Results 1885-1918* より集計。
- (2) 自由党の得票は、トマス (Thomas) とモーガン (Morgan) の得票を集計したものである。

党との組み票ではなく、労働党候補に単独票を投じるべきであった。またどちらの選挙でも保守党から候補は立っていないから、労働党支持者が労働党候補に単独票を集中したとしても、保守党が漁夫の利を得る危険性は全くなかった。労働党支持者にとって、保守党をはばむために自由党にタクティカル・ウォーティングを投じる必要はなかった。

ところがこうした事情にもかかわらず、表7をみると、1900年選挙における労働党ハーディーの単独票は15.1%に過ぎない。労働党のハーディーの得た票のうち、実に84.9%は自由党候補との組み票であった。自由党候補トマスの得票も、そのうち半分は、労働党との組み票として投じられている。1906年選挙でも、ハーディーの得た票のうち、77.1%は自由党候補との組み票であり、単独票は相当な比重ではあるが、22.9%にとどまっている。自由党候補トマスの得票は、1900年よりも単独票が減り、自由党のもう1人の候補ラドクリフ候補との組み票が、倍近くに膨れ上がった。だがそれでも自由党トマスに投じられた票のうちやはり53.0%は、依然として労働党ハーディーとの組み票として投じられた。

つまり労働党の創立者であり、独立した政治勢力としての労働者政党のために生涯闘い続けていたケア・ハーディーの足元でも、労働党支持者の多く

表7 1900年選挙と1906年選挙におけるマーサ・ティディフィル
選挙区の2票の分析

選挙	政党	候補	単独票	自由／自由	労働／自由	総得票
1900年	自由党	Thomas	2070 (24.1%)	2091 (24.3%)	4437 (51.6%)	8598
	労働党	Hardie	867 (15.1%)		4878 (84.9%)	5745
1906年	自由党	Morgan	~1472 (36.8%)	2091 (52.2%)	441 (11.0%)	4004
	自由党	Thomas	684 (4.9%)	5878 (42.1%)	7409 (53.0%)	13971
	労働党	Hardie	2337 (22.9%)		7850 (77.1%)	10187
	自由党	Radcliffe	1457 (18.7%)	5878 (75.6%)	441 (5.7%)	7776

注記

- (1) F.W.S.Craig ed., *British Parliamentary Election Results 1885-1918* より集計。
- (2) 単独票は、候補者に単独票として投じられた票の合計。
- (3) 自由／自由は自由党候補の組み票、労働／自由は労働党と自由党候補の組み票の合計を示す。
- (4) () 内は、各選挙におけるそれぞれの候補の総得票に占める比率を示す。

は労働党候補だけではなく自由党候補にも票を投じた。また逆に自由党候補のうち一人の候補トマスの支持者の半ばは、自由党候補のラドクリフが別に自由党から出ていたにもかかわらず、労働党のハーディーに票を投じたのである⁽⁴⁾。

とはいえ、もちろん自由党と労働党が一人ずつ候補を出して保守党と対決していた先のダービーの場合と、自由党と労働党が対決していたマーサ・ティディフィルは明らかに異なる。自由党候補の得票の中の労働党との組み票は、ダービーでは9割に達していたが、マーサ・ティディフィルでは、1900年のトマス候補の場合で51.6%、1906年のトマス候補の場合で53.0%に

1906年総選挙における自由党の再生と労働党

とどまっており、1900年のもう1人の自由党候補モーガンのハーディーとの組み票は、11.0%、1906年選挙のラドクリフ候補のハーディーとの組み票は、わずかに5.7%に過ぎなかった。

つまり労働党の支持者は、保守党と対決する場合には、自由党の支持者と堅いスクラムを組んでいたものの、自由党と争う場合には、候補者によつては、労働党から自由党にはほとんど票が流れなかつた。自由党の支持者と労働党の支持者は、ア・プリオリに連携協力するわけではなく、本来は異なつた投票行動をとる集団を構成していたことが分かる。

III 三つ巴の戦い

(1) 自由党の参戦—ブラックバーンとプレ斯顿

次に自由党、保守党、労働党の三つ巴の戦いの様相を分析しよう。1900年には保守に労働党だけが挑んだ選挙区で、1906年には保守、労働、自由党候補の三つ巴戦となつたのは表8に掲げる2つの選挙区であった。

表8が示すように、ブラックバーンの場合、保守党と労働党の争いに1906年には自由党候補が新たに参戦した。その結果、自由党と労働党の合計の得票率は、1900年の労働党の得票率のほぼ2倍近くの49.9%にまで跳ね上がつた。プレ斯顿の場合も、1906年に自由党候補が新たに参戦することによつて、1906年の自由党と労働党の合計の得票率は56.9%にも上昇し、1900年の労働党の得票率の2.5倍以上に上昇した。いずれの選挙区でも1900年に労働党候補だけで20%を超す票を集めてはいたが、保守党に対抗して議席を狙える地位にはなかつた。ところが1906年には自由党が闘いに加わることによつて、保守党の得票が激減する一方、自由党はもちろん労働党の得票率も上昇した。結局ブラックバーンでは、自由党のハマー (Hamer) は議席に届かなかつたが、労働党のスノーデン (Snowden) が議席を奪つた。そしてプレ斯顿では、労働党のマクファーソン (Macpherson) が見事一位当選を果たし、

表8 1900年に保守党と労働党が対決し、
1906年には三つ巴戦となつた選挙区の政党別得票率

選挙区	1900年			1906年		
	政党	得票	得票率	政党	得票	得票率
Blackburn	保守党 (2人)	20662	74.4%	保守党 (2人)	19223	50.1%
	労働党	7096	25.6%	自由党	8892	23.2%
				労働党	10282	26.7%

選挙区	1900年			1906年		
	政党	得票	得票率	政党	得票	得票率
Preston	保守党	17011	77.9%	保守党	14159	43.1%
	労働党	4834	22.1%	自由党	8538	26.0%
				労働党	10181	30.9%

注 記

(1) F.W.S.Craig ed., *British Parliamentary Election Results 1885-1918* より集計。

自由党のコックス (Cox) も議席を得ている。

プレストンの場合には、残念ながら1906年選挙における2票制の記録は残っていない。だが表9に示されたブラックバーンの2票の内訳をみると、1900年に保守党と労働党が対決した時には、労働党候補スノーデンの票のうち、単独票が実に75.2%を占めていた。これに対し保守、労働、自由の三つ巴になつた1906年選挙では、労働党スノーデンの単独票は14.6%に過ぎず、自由党候補ハマーとの組み票が76.6%を占め、単独票と組み票との構成比が逆転している⁽⁵⁾。

ブラックバーンでは、1900年選挙で労働党が保守党と単独で対峙した時、労働党は大きな票差をつけられて保守党に2議席とも奪われている。この経過からすれば、労働党の支持者にとっては、1906年選挙で自由党候補が参戦した時にも、労働党候補の当選を確実にするためには、自由党候補と組み票

1906年総選挙における自由党の再生と労働党

表9 1900年選挙と1906年選挙におけるブラックバーン選挙区の2票の分析

選挙	政党	候補	単独票	労働／自由	労働／保守	自由／保守	自由／自由	保守／保守	総得票
1900年	保守党	Hornby	280 (2.5%)		1700 (15.1%)			9267 (82.4%)	11247
	保守党	Coddington	87 (0.9%)		61 (0.6%)			9267 (98.4%)	9415
	労働党	Snowden	5335 (75.2%)		1761 (24.8%)				7096
1906年	保守党	Hornby	94 (0.9%)		822 (8.0%)	624 (6.1%)		8751 (85.0%)	10291
	労働党	Snowden	1504 (14.6%)	7871 (76.6%)	907 (8.8%)				10282
	保守党	Drage	10 (0.1%)		85 (1.0%)	86 (1.0%)		8751 (98.0%)	8932
	自由党	Hamer	311 (3.5%)	7871 (88.5%)		710 (8.0%)			8892

注記

- (1) F.W.S.Craig ed., *British Parliamentary Election Results 1885-1918* より集計。
- (2) 単独票は、候補者に単独票として投じられた票の合計。
- (3) 労働／自由は労働党と自由党候補の組み票、労働／保守は労働党候補と保守党候補の組み票、自由／保守は自由党候補と保守党候補の組み票、自由／自由は自由党候補の組み票の合計、保守／保守は保守党候補の組み票の合計を示す。
- (4) () 内は、各選挙におけるそれぞれの候補の総得票に占める比率を示す。

にすることなく、労働党に単独票を集中するほうが、労働党が確実に議席を手に入れる可能性が高かった。にもかかわらず1906年選挙では、労働党の支持者の7割以上が、あえて自由党候補との組み票を選んだ。一方1906年に新たに参戦した自由党の候補の得票の88.5%も、労働党候補との組み票として投じられており、自由党単独票はわずかに3.5%に過ぎなかった。これは労働党と自由党の支持層の強い結束を物語る現象として注目に値する。ただし1906年選挙でも、双方の支持層ともに、8—9%程度は、保守党との組み票

を投じている。この事実は、両党の支持層には、相対的には少数ではあったが、自由党－労働党の同盟関係に疑問をもつ人々もいたことを示している。

(2) 労働党の参戦－ニューカッスルとストックポート

前項とは逆に、自由党と保守党あるいは自由統一党が対決していた選挙区で、労働党が新たに参戦した場合を検討してみよう。25の2人区のうち、1900年選挙では自由党2候補と保守党2候補が対決し、1906年選挙では労働党が参戦して、自由党候補1人、労働党候補1人と保守党2候補の対決となった選挙区は次の2つの選挙区であった。

表10から見て取れるように、ニューカッスルの場合、自由党と保守党が対

表10 1900年に保守党と自由党が対決し、1906年には労働党が参戦した2人区の政党別得票率

選挙区	1900年			1906年		
	政党	得票	得票率	政党	得票	得票率
Newcastle upon Tyne	保守党(2人)	29849	58.7%	保守党(2人)	23165	38.4%
	自由党(2人)	20951	41.3%	自由党	18423	30.5%
				労働党	18869	31.1%

選挙区	1900年			1906年		
	政党	得票	得票率	政党	得票	得票率
Stockport	保守党(2人)	10475	49.1%	保守党(2人)	8655	38.5%
	自由党(2人)	10866	50.9%	自由党	6645	27.9%
				労働党	6682	28.0%

注 記

(1) F.W.S.Craig ed., *British Parliamentary Election Results 1885-1918* より集計。

1906年総選挙における自由党の再生と労働党

決した1900年選挙に比べて、労働党が参戦した1906年総選挙では、自由党と労働党をあわせた得票率は、1900年の自由党の得票率に比べて20%も跳ね上がった。ストックポートの場合は、それほど急激な増加ではないが、それでも1906年選挙での自由党と労働党をあわせた得票率は、1900年の自由党得票率よりも6%増加した。その結果、1900年には、ニューカッスルでは自由党は議席に届かず、ストックポートでは自由党は1議席しか取れていなかつたが、1906年にはどちらの選挙区でも、自由党と労働党が1議席ずつ獲得した。ただし両方とも労働党が一位で当選している。

表11に示されるニューカッスル選挙区の2票の内訳をみてみると、1900年選挙では、保守党票のうち96.1%、98.3%がもう一人の保守党の候補との組み票であり、自由党票も、94.6%、94.8%が相方の自由党候補との組み票であった。保守党の側の自由党との組み票の比率は、わずか3.0%と1.4%に過ぎない。自由党の側の保守党との組み票の比率もそれぞれ2.6%、3.7%にとどまっていた。保守党と自由党の支持者は、やはり明確に区別された集団であったと考えられる。

ところが1906年に自由党が候補を1人に絞り、かわりに労働党が立候補すると、自由党票のうち、94.4%が新たに立候補した労働党候補との組み票として投じられている。労働党に投じられた票も、92.2%が自由党との組み票であった。自由党の単独票はわずかに4.4%、労働党の単独票も5.4%にとどまつた。つまり自由党の支持者はほぼ9割以上がそつくり新たな労働党候補に投票した。しかも1906年には、自由党票のうち保守党との組み票はわずかに1.2%であり、労働党に投じられた票のうち保守党との組み票も2.4%に過ぎなかつた。実際、1906年での自由党、労働党の保守党との組み票の比率は、1900年選挙における自由党票の保守党との組み票の比率よりも低い。つまり自由党が候補を1人に絞り、自由党と労働党が1人ずつ立候補することになつたにもかかわらず、自由党支持者が自由党だけに単独票を集中したり、自由党支持者が保守党に逃げたりする事態はほとんど全く起こらなかつた。そればかりか自由党の支持者は、1900年選挙の時の自由党のペア候補とほぼ同様に労働党候補にすすんで票を入れたのである⁽⁶⁾。

表11 1900年選挙と1906年選挙におけるニューカッスル選挙区の2票の分析

選挙	政党	候補	単独票	労働／自由	労働／保守	自由／保守	自由／自由	保守／保守	総得票
1900年	保守党	Plummer	135 (0.9%)			455 (3.0%)		14507 (96.1%)	15097
	保守党	Renwick	44 (0.3%)			201 (1.4%)		14507 (98.3%)	14752
	自由党	Storey	294 (2.8%)			274 (2.6%)	9920 (94.6%)		10488
	自由党	Lambton	161 (1.5%)			382 (3.7%)	9920 (94.8%)		10463
1906年	労働党	Hudson	1013 (5.4%)	17396 (92.2%)	460 (2.4%)				18869
	自由党	Cairns	805 (4.4%)	17396 (94.4%)		222 (1.2%)			18423
	保守党	Plummer	170 (1.4%)		436 (3.7%)	192 (1.6%)		11144 (93.3%)	11942
	保守党	Renwick	25 (0.2%)		24 (0.25%)	30 (0.3%)		11144 (99.3%)	11223

注 記

- (1) F.W.S.Craig ed., *British Parliamentary Election Results 1885-1918* より集計。
- (2) 単独票は、候補者に単独票として投じられた票の合計。
- (3) 労働／自由は労働党と自由党候補の組み票、労働／保守は労働党候補と保守党候補の組み票、自由／保守は自由党候補と保守党候補の組み票、自由／自由は自由党候補の組み票の合計を示す。
- (4) () 内は、各選挙におけるそれぞれの候補の総得票に占める比率を示す。

ストックポート選挙区についてはデータが不完全であるが、それでも、表12をみると、やはり1906年に労働党が立候補した際には、自由党票のうち、自由党単独票は4.8%に過ぎず、91.7%が労働党との組み票であった。労働党の側の単独票は8.8%と、ニューカッスルに比べればかなり高かったものの、82.2%はやはり自由党との組み票として投じられている。ただし労働党には、保守党支持者との組み票も10%近くあったと推計される⁽⁷⁾。

これに対して表13に掲出しているダンディー選挙区では、1900年には、保

1906年総選挙における自由党の再生と労働党

表12 1900年選挙と1906年選挙におけるストックポート選挙区の2票の分析

選挙	政党	候補	単独票	労働／自由	労働／保守	自由／保守	自由／自由	保守／保守	総得票
1900年	自由党	Leigh	N.A.			N.A.	5089 (89.8%)	14507 (96.1%)	5666
	保守党	Melville	N.A.			N.A.		4931 (91.7%)	5377
	自由党	Green	N.A.			N.A.	5089 (97.9%)		5200
	保守党	Hiller	N.A.			N.A.		4931 (96.7%)	5098
1906年	労働党	Wardle	642 (8.8%)	6000 (82.2%)	N.A.				7299
	自由党	Duckworth	317 (4.8%)	6000 (91.7%)		N.A.			6544
	保守党	Barnston	50 (1.1%)		N.A.	N.A.		3843 (83.7%)	4591
	保守党	O'Neil	27 (0.7%)		N.A.	N.A.		3843 (94.6%)	4064

注記

- (1) F.W.S.Craig ed., *British Parliamentary Election Results 1885-1918* より集計。
- (2) 単独票は、候補者に単独票として投じられた票の合計。
- (3) 労働／自由は労働党と自由党候補の組み票、労働／保守は労働党候補と保守党候補の組み票、自由／保守は自由党候補と保守党候補の組み票、自由／自由は自由党候補の組み票の合計を示す。
- (4) () 内は、各選挙におけるそれぞれの候補の総得票に占める比率を示す。
- (5) N.A.はデータがない事を示す。

保守党と自由統一党候補に対して自由党候補2人が挑んだが、1906年には、保守党と自由統一党候補2人に対して、自由党候補2人に加えさらに労働党候補が1人立候補した。つまり自由党は候補を絞らず、自由党2人に労働党が割って入る形となった。この場合も、表13に示されているように、自由党と労働党をあわせた得票率は、1900年の自由党の合計得票率より16%も増え、結局新たに立候補した労働党候補と自由党候補が議席を分け合った。

表14に示されたダンディー選挙区の2票の行方をみると、1906年選挙で自由党2候補に加えて新たに立候補した労働党候補ウイルキー（Wilkie）が獲得した票のうち、単独票は37.4%にのぼっている。一方労働党のウイルキーと自由党候補ロバートソン（Robertson）、ロブソン（Robson）との組み票は48.4%に達している。ただし労働党ウイルキーと保守党候補スミス（Smith）、自由統一党候補のシャックルトン（Shackleton）との組み票も14.2%とかなりの比重を占めていた。また自由党候補の支持者の側も、ロバートソン候補の労働党との組み票は34.3%だったが、自由党ロブソン候補の場合には、労働党との組み票はわずか2.0%に過ぎなかった。逆に自由統一党シャックルトンの票のうち労働党との組み票が19.9%もあったことが注目される⁽⁸⁾。

つまりニューカッスルやストックポートのように自由党が候補を絞り労働党と自由党が1人ずつ出た場合には、自由党と労働党の支持者は、ほぼ9割が票を分け合った。これに対し、自由党候補が2人出て労働党と競合したダンディーの場合、労働党の支持者の半ばは自由党候補にも投票したものの、労働党は3割を越す単独票を集め、労働党の支持者は自由党ばかりでなく保守党にも組み票を投じた。そして労働党は、自由党が2議席制するのを阻止し、見事に議席を奪取したのである。

表13 1900年に保守党と自由党が対決し、1906年には
三つ巴戦となった選挙区の政党別得票率

選挙区	1900年			1906年		
	政 党	得 票	得票率	政 党	得 票	得票率
Dundee	自由統一党	5152	20.0%	自由統一党	3865	13.2%
	保 守 党	5181	20.1%	保 守 党	3183	10.9%
	自由党（2人）	15427	59.9%	自由党（2人）	15398	52.6%
				労 働 党	6833	23.3%

注 記

(1) F.W.S.Craig ed., *British Parliamentary Election Results 1885-1918* より集計。

1906年総選挙における自由党の再生と労働党

表14 1900年選挙と1906年選挙におけるダンディー選挙区の2票の分析

選挙	政党	候補	単独票	労働／自由	労働／保守	自由／保守	自由／自由	保守／保守	総得票
1900年	保守党	Robertson	45 (0.6%)			283 (3.1%)	7494 (96.4%)		7777
	自由党	Leng	38 (0.5%)			118 (1.5%)	7494 (98.0%)		7650
	保守党	Smith	49 (0.9%)			194 (3.7%)		4938 (95.3%)	5181
	自由統一党	Graham	52 (1.0%)			162 (3.1%)		4838 (95.8%)	5152
1906年	自由党	Robertson	51 (0.5%)	3183 (34.3%)		89 (1.0%)	5953 (64.2%)		9276
	労働党	Wilkie	2553 (37.4%)	3307 (48.4%)	973 (14.2%)				6833
	自由党	Robson	16 (0.2%)	124 (2.0%)		32 (0.5%)	5953 (97.2%)		6122
	自由統一党	Shackleton	70 (1.8%)		769 (19.9%)	92 (2.4%)		2934 (75.9%)	3865
	保守党	Smith	16 (0.5%)		204 (6.4%)	29 (0.9%)		2934 (92.2%)	3183

注記

- (1) F.W.S.Craig ed., *British Parliamentary Election Results 1885-1918* より集計。
 - (2) 単独票は、候補者に単独票として投じられた票の合計。
 - (3) 労働／自由は労働党と自由党候補の組み票、労働／保守は労働党候補と保守党候補ないし自由統一党候補との組み票、自由／保守は自由党候補と保守党候補ないし自由統一党候補との組み票、自由／自由は自由党候補の組み票の合計を示す。
 - (4) () 内は、各選挙におけるそれぞれの候補の総得票に占める比率を示す。
 - (5) なお1906年のダンディー選挙区の2票制の記録は、単独票、組み票の数値と最終結果の数値に若干の齟齬がある。ここでは最終結果を尊重し、Robertson/Robsonの組み票を5353、組み票の総計を15991に訂正して集計した。
- (3) 三つ巴の戦い—サンダーランド、ハリファックス、レスター

ダンディーの事例が示すように、自由党と労働党の支持者は、共通の敵に

は結束していたものの、常に協調していたというわけではない。労働党は場合によっては、自由党と争って議席を奪い取る力を發揮した。両党の支持者は、政治状況によって、あるいは結束あるいは厳しく競い合った。1900年選挙と1906年選挙双方とも保守・自由・労働の三つ巴で争われた選挙区の結果について、この緊張を孕んだ連携関係を観察してみよう。このカテゴリーにあてはまる選挙区は以下の3つの選挙区であった。

表15が示しているように、1900年選挙でも1906年選挙でも、保守党候補2人に対して自由党と労働党候補が1人ずつ出馬したサンダーランドでは、1906年選挙では自由党も労働党とともに、1900年選挙に比べて7-8%も得票率を増やした。労働党も自由党もほぼ同じように得票率が増加していることが注目される。

これに対して1900年選挙では、自由統一党の候補1人に対して、自由党候補2人、労働党候補1人が立ち、1906年選挙では、自由統一党1人に対して、

表15 1900年選挙と1906年選挙の双方で、保守党・自由党・労働党が
三つ巴で戦った選挙区の政党別得票率

選挙区	政党	1900年	1906年	差
Halifax	自由統一党	29.6%	21.6%	- 8.0%
	自由党	54.1% (2人)	40.1%	-14.0%
	労働党	16.3%	38.3%	+ 22%
Leicester	保守党	28.2%	20.3%	- 7.9%
	自由党	59.1% (2人)	39.9%	-19.2%
	労働党	13.0%	39.8%	+26.8%
Sunderland	保守党	51.3% (2人)	35.7% (2人)	-15.6%
	自由党	25.1%	32.2%	+ 7.1%
	労働党	23.6%	31.9%	+ 8.3%

注記

- (1) F.W.S.Craig ed., *British Parliamentary Election Results 1885-1918* より集計。
(2) 自由党には、自由党の労働者候補 (Lib/Lab) を含む。

1906年総選挙における自由党の再生と労働党

自由党 1 人労働党 1 人が挑んだハリファックスの場合には、労働党が22%をとったために、自由党は14.0%へと得票率を落としたが、自由党と労働党を合計した得票率は、1900年の70.4%に対して1906年には78.3%と、サンダーランドと同じように 8 %弱上昇した。

一方ハリファックスと同じように、1900年選挙では保守党 1 人に対して、自由党 2 人、労働党候補 1 人が立ち、1906年には、保守党 1 人に対して、自由党 1 人と労働党 1 人に候補が絞られたレスターでは、労働党が26.8%もの得票をとり、自由党は19.2%へと得票を落としたものの、自由党と労働党を合計した得票率はやはり 72.1% から 79.7% へ 7 % 上昇した。

つまりハリファックスとレスターでは、1906年には、候補者調整によって候補者が自由党 1 人と労働党 1 人に絞られた。候補者が絞られたため自由党の得票率は下がったが、自由党と労働党の合計得票率は上昇し、結果として、自由党と労働党が議席を得たのである。ハリファックスとレスターの例は、自由党と労働党の支持者の連携が、労働党を議席に押し上げる上で絶大な威力を発揮したことをさまざまと示している。ただし、いずれの選挙区でも自由党候補と労働党がほぼ互角の集票力を示したこと事は重要である。

この 3 選挙区における 2 票の内訳をみると、1900年の時点ですでに自由党候補が 1 人に絞られていたサンダーランドの場合には、表16が示しているように、1900年選挙の時点で、すでに自由党票の 91.5% は労働党との組み票であり、労働党に投じられた票の 97.0% も自由党との組み票であった。サンダーランドでは1900年には自由党、労働党とも議席には届かなかつたが、全国的な保守勢力の圧勝の中で、自由党候補のハンター (Hunter) は 240 票差まで保守党に詰め寄った。1900年のサンダーランド選挙区の結果は、自由党と労働党が協力すれば、議席を獲得できる可能性を強く示唆するものであったといつてよい。

1900年の惜敗を踏まえてのぞんだ1906年選挙では、自由党と労働党の連携はついに実を結んだ。自由党と労働党との組み票の比率は自由党側で 83.1%、労働党側で 84.3% と少し低下し、単独票の割合が自由党は 9.5%、労働党は 6.2

表16 1900年選挙と1906年選挙におけるサンダーランド選挙区の2票の分析

選挙	政党	候補	単独票	労働／自由	労働／保守	自由／保守	自由／自由	総得票
1900年	保守党	Doxford	358 (3.7%)		60 (0.6%)	245 (2.5%)	8954 (93.1%)	9617
	保守党	Pemberton	178 (1.9%)		142 (1.5%)	292 (3.1%)	8954 (93.6%)	9617
	自由党	Hunter	255 (2.7%)	8578 (91.5%)		537 (5.7%)		9370
	労働党	Wilkie	62 (0.2%)	8578 (97.0%)	202 (2.3%)			8842
1906年	自由党	Stuart	1294 (9.5%)	11323 (83.1%)		1003 (7.4%)		13620
	労働党	Summerbell	833 (6.2%)	11323 (84.3%)	1274 (9.5%)			13430
	保守党	Haggie	2450 (31.1%)		300 (3.8%)	193 (2.4%)	4936 (62.6%)	7879
	保守党	Pemberton	524 (7.2%)		974 (13.4%)	810 (11.2%)	4936 (68.1%)	7244

注 記

- (1) F.W.S.Craig ed., *British Parliamentary Election Results 1885-1918* より集計。
- (2) 単独票は、候補者に単独票として投じられた票の合計。
- (3) 労働／自由は労働党と自由党候補の組み票、労働／保守は労働党候補と保守党候補の組み票、自由／保守は自由党候補と保守党候補の組み票、自由／自由は自由党候補の組み票の合計を示す。
- (4) () 内は、各選挙におけるそれぞれの候補の総得票に占める比率を示す。

%へと高まった。しかし保守党の票が大きく落ち込む一方で、自由党と労働党の合計の得票は大きく躍進して保守党の2候補の票の倍近くへ膨れ上がり、自由党と労働党は圧勝を収めた⁽⁹⁾。

一方表17が示しているように、1900年選挙で自由統一党1人に対して自由党候補2人、労働党候補が1人立ったハリファックスは、自由党と労働党が協力しない場合におこりうる結果をまざまざと示した。1900年選挙では、労働党候補パーカー (Parker) の得票のうち、単独票が42.9%を占め、自由党と

1906年総選挙における自由党の再生と労働党

の組み票は17.8%に過ぎなかった。むしろ逆に労働党票のうち自由統一党クロスレイ (Crossley) との組み票は、39.4%にのぼり、自由党との組み票の倍以上もあった。自由党の候補のウイトレイ (Whitley)、ビルソン (Billson) の側からみても、労働党候補パーカーとの組み票は、それぞれ6.5%と4.2%と、極めて低い比率にとどまっていた。つまりハリファックスにおいては、1900年の段階では、自由党と労働党の支持層は、明瞭に異なった集団を形成しており、労働党の支持者の中には、むしろ自由統一党に親近感を覚える人が多かったのである。2人の候補者をたてた自由党の支持者も、あえて労働

表17 1900年選挙と1906年選挙におけるハリファックス選挙区の2票の分析

選挙	政党	候補	単独票	労働／自由	労働／保守	自由／保守	自由／自由	総得票
1900年	自由統一党	Crossley	4212 (71.0%)		1290 (21.8%)	429 (7.2%)		5931
	自由党	Whitley	42 (0.8%)	361 (6.5%)		271 (4.9%)	4869 (87.8%)	5543
	自由党	Billson	77 (1.4%)	221 (4.2%)		158 (3.0%)	4869 (91.4%)	5325
	労働党	Parker	1404 (42.9%)	582 (17.8%)	1290 (39.4%)			3276
1906年	自由党	Whitley	424 (4.5%)	8572 (91.6%)		358 (3.8%)		9354
	労働党	Parker	211 (2.4%)	8572 (95.9%)	154 (1.7%)			8937
	自由統一党	Crossley	4529 (89.8%)		154 (3.1%)	358 (7.1%)		5041

注 記

- (1) F.W.S.Craig ed., *British Parliamentary Election Results 1885-1918* より集計。
- (2) 単独票は、候補者に単独票として投じられた票の合計。
- (3) 労働／自由は労働党と自由党候補の組み票、労働／自由統一は労働党候補と自由統一党候補の組み票、自由／自由統一は自由党候補と自由党統一党候補の組み票、自由／自由は自由党候補の組み票の合計を示す。
- (4) () 内は、各選挙におけるそれぞれの候補の総得票に占める比率を示す。

党候補に組み票を投じようとする者はほとんどいかなった。

1900年選挙では、ハリファックスの労働党支持層は、自由党の支持者とは質的に異なっており、しかも労働党単独では、当選ラインから数千票も下まわっていたため、議席に届く力はなかった。だがもし自由党支持者と労働党支持者とが手を結べば、自由統一党を議席から叩き落す可能性が開けてくることも、この結果は物語っていた。

事実、自由党が候補を1人に絞って、労働党と自由党候補が1人ずつ立つた1906年選挙では、事態は一変した。1906年には、労働党候補パーカーの得票のうち実に95.9%が自由党との組み票となっている。自由党の側からみても、自由党候補ウイトレイの得票のうち91.6%が労働党との組み票となった。1900年には、労働党候補を見向きもしなかった自由党の支持者が、1906年選挙ではこそって労働党候補に票を投じたのであった。

ハリファックスの場合、1900年には、基本的には異なったブロックであった自由党と労働党の支持層は、1906年には、緊密な協力関係を打ち立て、一体となって自由統一党から議席を奪った。ハリファックスの事例は、草の根での両党支持層の対決から協調への転換を鮮やかに示している⁽¹⁰⁾。

さらに労働党の書記で後に労働党政権の首相となるラムゼイ・マクドナルド (Ramsay Macdonald) が立候補したレスターの事例を検討してみよう。表18が示しているように、レスターでは、1900年選挙においては、保守党候補1人に対して、自由党候補2人と労働党候補1人が立ち、結局自由党のブロードハースト (Broadhurst) と保守党のロールストン (Rollston) が当選し、自由党のヘイゼル (Hazell) と労働党マクドナルドが落選の憂き目をみた。ただし落選した自由党候補のヘイゼルは、労働党との組み票を97票 (1.1%) しか獲得できず、保守党のロールストンに500票余の差をつけられて落選した。一方1位となった自由党候補ブロードハーストは、労働党との組み票を1708票 (16.4%) 獲得しており、これが当選を確実にした。

労働党のマクドナルドは、当選ラインから5000票近く離されていた。このため、労働党は独力で議席を獲得する力がないことは明らかであった。1900

1906年総選挙における自由党の再生と労働党

表18 1900年選挙と1906年選挙におけるレスター選挙区の2票の分析

選挙	政党	候補	単独票	労働／自由	労働／保守	自由／保守	自由／自由	総得票
1900年	自由党	Broadhurst	208 (2.0%)	1708 (16.4%)		349 (3.4%)	8120 (78.2%)	10385
	保守党	Rolleston	7638 (84.2%)		923 (10.2%)	505 (5.6%)		9066
	自由党	Hazell	155 (1.8%)	97 (1.1%)		156 (1.8%)	8120 (95.2%)	8528
	労働党	Macdonald	1436 (34.5%)	1805 (43.3%)	923 (22.2%)			4164
1906年	自由党	Broadhurst	421 (2.9%)	13999 (94.9%)		325 (2.2%)		14745
	労働党	Macdonald	426 (2.9%)	13999 (95.3%)	260 (1.8%)			14685
	保守党	Rolleston	6919 (92.2%)		260 (3.5%)	325 (4.3%)		7504

注記

- (1) F.W.S.Craig ed., *British Parliamentary Election Results 1885-1918* より集計。
- (2) 単独票は、候補者に単独票として投じられた票の合計。
- (3) 労働／自由は労働党と自由党候補の組み票、労働／保守は労働党候補と保守党候補の組み票、自由／保守は自由党候補と保守党候補の組み票、自由／自由は自由党候補の組み票の合計を示す。
- (4) () 内は、各選挙におけるそれぞれの候補の総得票に占める比率を示す。

年選挙でのマクドナルドの票のうち、43.3%が自由党との組み票であったが、単独票も34.5%に達していた。他方労働党マクドナルドの票には、保守党候補ロールストンとの組み票も22.2%あったことは注目に値する。つまり1900年の時点では、労働党の支持者の4割を越す人々が自由党にも投票していたが、自由党を嫌って保守党に票を投じる人々も2割以上含まれていたのである。

しかし1906年に自由党が候補を1人に絞ると、事態は根底から変貌する。自由党候補ブロードハーストの票の94.9%は、労働党マクドナルドとの組み票となった。他方、労働党のマクドナルドの票の95.3%は自由党候補との組

み票として投じられている。マクドナルドに投じられた票のうち、保守党ローレルストンとの組み票は、わずかに260票（1.8%）に過ぎない。

こうしてレスターでは、1900年選挙では、自由党と労働党の支持者は重なつてはいたものの、労働党の得票には単独票が相当な比重を占めており、保守党と労働党との組み票も決して少なくなかった。この結果1900年選挙では、労働党と自由党に票が割れて保守党候補が当選する結果となったのである。これに対し1906年選挙では、候補者調整の結果、自由党と労働党が1人ずつに絞られたため、自由党と労働党の支持者の間に強い連携が打ち立てられた。こうして自由党と労働党は、保守党を議席から締め出したのであった⁽¹¹⁾。

こうした選挙区では、労働党は明らかにまだ単独では議席を手中にする力は無かった。自由党と労働党が協力する場合、大多数の労働党支持者は自由党にも投票した。だが自由党と争う場合には、労働党はかなりの単独票を集め、保守党と労働党との組み票も少なからず投じられていた。だから労働党が立候補すると、反保守陣営の票が割れ、しばしば保守党が議席を占める結果となった。逆に労働党と自由党が候補者を調整するのに成功すると、両党の支持層は、緊密な結束を示し、一体となって保守党を議席から蹴落とした。1906年にハリファックスとレスターで、自由党と労働党が議席を手中にする原動力となったのは、労働党支持者が単独票を投じるのにかえて、9割を超す組み票を自由党に投じたためであった。

IV 結びにかえて

1906年選挙の2人区では、自由党と保守陣営が一騎打ちで対決した場合、自由党は1900年選挙比べて10%近く得票率を伸ばした。だが自由党と保守党の支持層が、燐然と区別されていたのに対し、自由党と労働党の支持者は、緊張を孕みながらも、保守陣営と対決する場合には、強固な結束をみせた。本稿を締めくくるために、各選挙区における自由党票の中の労働党との組み票の比率、労働党票の中の自由党との組み票の比率をあらためてまとめておこう。

1906年総選挙における自由党の再生と労働党

表19、表20は、1900年選挙と1906年選挙の2票制の記録が残っている2人区の記録から、自由党票における労働党との組み票、労働党票における自由党との組み票を改めてまとめて一覧に集計したものである。既に検討した事例に、いずれかの選挙でのデータが欠けていたため本文での検討の対象からははずした事例が加えられている。

表19が示しているように、1900年の場合も、1906年の場合も、2人区の自由党と労働党の支持者の関係は、政党の対決のパターンに応じて、3つのグループに分けられる。1900年選挙において保守党候補1人に対して、自由党候補2人と労働党候補1人が立ったハリファックスとレスターでは、自由党票の労働党との組み票の比率は10%にも満たなかった。自由党候補と労働党候補が1人ずつ立ったダービー、サンダーランドでは、自由党票の中の労働党の組み票は9割近くにも達している。保守党候補が立候補せず、自由党候補2人と労働党候補1人が争ったマーサ・ティディフィルでは、自由党票の中の労働党組み票は4割弱にとどまった。

1906年選挙では、ポーツマスとマーサ・ティディフィル、ダンディー以外は、すべて自由党と労働党の候補が1人ずつに絞られた。ボルトンやヨークでは組み票の比率がやや低いものの、こうした選挙区では、やはりおおむね自由党票の8割から9割が労働党との組み票として投じられた。一方保守党

表19 1900年総選挙における自由党と労働党の組み票

	自由党票	労働党との組み票	組み票の比率	労働党票	自由党との組み票	組み票の比率
Derby	7922	6961	87.9%	7640	6961	91.1%
Halifax	10868	582	5.4%	1404	582	41.5%
Leicester	18913	1805	9.5%	4164	2154	51.7%
Sunderland	9370	8578	91.5%	8842	8578	97.0%
Merthyr Tydfil	12602	4878	38.7%	21747	7850	36.1%

注 記

(1) F.W.S.Craig ed., *British Parliamentary Election Results 1885-1918* より集計。

表20 1906年総選挙における自由党と労働党の組み票

	自由党票	労働党との組み票	組み票の比率	労働党票	自由党との組み票	組み票の比率
Blackburn	8892	7871	88.5%	10282	7871	76.6%
Bolton	10953	7828	71.5%	10416	7828	75.2%
Halifax	9354	8572	91.6%	8937	8572	95.9%
Leicester	14745	13999	94.9%	14685	13999	95.3%
Newcastle	18423	17396	94.4%	18869	17396	92.2%
Norwich	10972	10097	92.0%	11059	10097	91.3%
Portsmouth	20736	2010	9.7%	8172	2010	24.6%
Stockport	6544	6000	91.7%	7299	6000	82.2%
Sunderland	13620	11323	83.1%	13430	11323	84.3%
York	6413	4042	63.0%	4573	4042	88.4%
Merthyr Tydfil	21747	7850	36.1%	10187	7850	77.1%
Dundee	15398	3307	21.5%	6833	3307	48.4%

注 記

- (1) F.W.S.Craig ed., *British Parliamentary Election Results 1885-1918* より集計。
 (2) このほか、Preston プレストンで労働党、自由党と保守党が争っているが、2票制の記録が欠けているため、集計から除いている。

2人、独立候補1人に自由党2人と労働党1人が立ったポートマスや、自由統一党と保守党候補に自由党2人と労働党が挑んだダンディーの場合には、自由党票の中の労働党との組み票は、ポートマスでは9.7%に過ぎず、ダンディーでも21.5%にとどまった。そして自由党2人と労働党の争いが続いたマーサ・ティディフィルでは、自由党と労働党の組票の比率は、1900年と同程度の36.1%の水準であった。

つまり自由党と労働党が競い合う場合には、自由党支持者の10%以下、多くてもせいぜい20%程度しか労働党には投票しなかった。労働党支持者も、せいぜい半分程度しか自由党に投票しなかった。一方両党が候補者を絞り込

んで連携した時には、両党の支持者の結束は極めて固く、組み票の比率は9割にも達し、絶大な集票効果を發揮した。注目すべきことには、こうした両党の支持者の関係には、1900年選挙でも1906年選挙でも大きな変化は認められなかつた。

しかしこの連携による集票効果は、自由党だけを利したわけでは決して無かつた。1906年に、この連携によって、ニューカッスル、ノリッジ、ストックポート、そしてプレストンで、労働党は自由党を抑えて1位当選を果たした。そしてブラックバーンでは、自由党をおしのけて労働党と保守党が当選したのである。

労働党は、当選圏内にいなくとも相当な比重の単独票を集める力を持っていた。このため自由党は、議席を確保しようとすれば、労働党と提携する必要に迫られた。1903年に労働党書記のマクドナルドが、自由党の院内総務ヘーバート・グラッドストーン (Herbert Gladstone) と会って選挙協力を議論した時にも、マクドナルドは労働代表委員会の動員力を誇示して、協力しなければ共倒れになると、自由党を威嚇した⁽¹²⁾。一方、自由党と労働党が候補者を調整すれば、自由党、労働党の支持者は9割近くが双方に組み票を投じた。つまり自由党と労働党の提携は、保守陣営と対抗する場合、驚くほど緊密であったが、両者の協力は、実は労働党の独立した勢力としての潜在的な党勢の高まりを背景とした鋭い緊張を孕んだ関係でもあった。そして2人区についていえば、むしろ労働党の側こそ、両党の提携によって、自由党持者の票を取り込み、成長を加速させていったのであった。

注

- (1) 本稿は、獲得議席をベースとして1906年総選挙についての分析を試みた拙稿「1906年総選挙と自由党の再生－20世紀初頭の補欠選挙と1906年総選挙における対決の構図－」(『英米研究』第30号、大阪外国语大学英米学会、2006年所収)の続編にあたり、第三次選挙法改正後のイギリスの選挙政治についての筆者の一連の研究の一環をなしている。全体の背景をなす研究状況と筆者の問題意識については、「近代イギリス選挙史研究序説－第三次選挙法改正後のイギリスの

政治変動ー」(『イギリス研究の動向と課題』、大阪外国语大学、1997年所収)および「選挙の歴史学」(『世界地域学への招待』、嵯峨野書院、1998年所収)を参照。1885年、1886年総選挙についての筆者の分析は、「アイルランド自治問題とイギリス政治の転換」(『グローバル・ヒストリーの構築と歴史記述の射程』(大阪外国语大学、2000年3月)を、1892年、1895年、1900年総選挙の分析については「19世紀末における自由党の衰退」(『国際社会への多元的アプローチ』大阪外国语大学、2001年)と「自由党の衰退と反攻—19世紀末イギリス総選挙と補欠選挙ー」『英米研究』(大阪外国语大学英米学会、2004年)を参照されたい。なお最近のイギリスの現代史研究動向の一端については、「Martin Pugh, *The Making of Modern British Politics*—各版の異同と改訂の意味」(EXORIENTE 大阪外国语大学言語社会学会 Vol. 9 2004年)を参照されたい。

- (2) 20世紀初頭の2人区の自由党と労働党の2票の分析は、すでに旧稿「自由党再生の構造」松田他編『近代世界システムの歴史的構図』(渓水社1993年所収)でも概括的に取り上げたところであるが、本稿では視点を1906年選挙に引き絞り、両党の支持層の投票行動についてさらに立ち入った分析を試みている。本稿では、旧稿で指摘した自由党と労働党の支持層の強固な結束を改めて裏付けているが、同時に両党の支持層の間の潜在的な緊張を明らかにしている。なお、自由党と労働党の選挙協力の全体像については、F. Bearley and H. Pelling, *Labour and Politics*, (London, 1958) および Frank Bealey, 'The Electoral Arrangement between the Labour Representation Committee and the Liberal Party' *Journal of Modern History*, December 1965. を参照。
- (3) ダービー選挙区の全般的な状況については、Henry Pelling, *Social Geography of British Elections*, (London, 1967), pp.211-212. ベルは、鉄道員組合の書記であり労働代表委員会の一員であったが、結局1906年選挙では自由党から立候補した。ベルは1902年に労働代表委員会の議長となったものの、独立した労働者政党の理念には終始批判的で、自由党に対抗して労働党が選挙に立つことを認めず、鉄道組合と労働組合評議会双方を巻き込んだ混乱の末、ついに労働代表委員会の候補者リストからはずされた。F. Bearley and H. Pelling, *op.cit.*, pp.195-197.
- (4) マーサ・ティディフィル選挙区の全般的な状況については、Henry Pelling, *op.cit.*, pp.351-352. マーサ・ティディフィルは、かつてさかえた製鉄業は衰退し主として炭鉱の町となっていたが、1900年、この地区的労働組合会議は、選挙区をかえりみず、南ア戦争を支持した自由党候補モーガンにかえて、独立した労働者候補としてケア・ハーディーを擁立することを決定した。もう1人の自由党議員トマス

は炭鉱主ではあったが、急進的な親ボーア派であり、このことが労働者の支持の厚さ、ハーディーとの組み票の多さの要因となっていると思われる。ハーディーは、最初トマス以外に自由党候補が立つと思っておらず、二人目の自由党候補ラドクリフが立つと、ハーディー陣営はパニックに陥った。選挙戦後半には、ハーディーは自分の選挙区にとどまって、労働者の独自の要求ではなく、貴族院の廃止やウエールズの非国教会化、女性参政権、老齢年金、軍事費削減といった急進的な改革の主張を訴えて回った。ハーディーは議席を確保したものの、マーサ・ティディフィルの自由党の支持基盤は厚く、「社会主義の牙城からは程遠かった」(K.O.Morgan, *Keir Hardie*, London, 1975, pp.150-151.) なお炭鉱夫の政治状況については、Roy Gregory, *The Miners and Politics* (Oxford, 1968) を参照。

- (5) ブラックバーン、プレストン選挙区の全般的な状況については、Henry Pelling, *op.cit.*, pp.261-262を参照。プレストンには、カソリックのアイルランド移民労働者が多く、そのことが逆に国教徒の保守党への結束を強め、プレストンを保守党色の強い選挙区としていた。ブラックバーンも同様に保守色が強かったが、保守党のホーンビー Honby 議員は、紡績工場主で自由貿易論者であったため、1906年選挙でも自由党に議席を奪われることなく生き延びた。プレストンの政治状況については、M.Savage, *The Dynamics of Working Class Politics* (London, 1987) を参照。
- (6) ニューカッスル選挙区の全般的な状況については、Henry Pelling, *op.cit.*, pp.324-325を参照。この選挙区は、もともとグラッドストーン派の重鎮モーリー Morey の選挙区であったが、1895年にモーリーは議席を落とし、世紀末には保守陣営が優勢となっていた。1906年選挙で労働党と自由党は議席を奪い取ったが、ペリングもこれはもっぱら、両党の協力によるものと考えている。
- (7) スットクポート選挙区の全般的な状況については、Henry Pelling, *op.cit.*, pp.254-255参照。この選挙区は、紡績と帽子製造が行われるとともに、自由党を支持する非国教徒の影響が強い地域であったが、同時にカソリックのアイルランド移民も少なくなく、この結果、国教徒の保守党への支持もこれに拮抗していた。ペリングは、労働党が自由党よりも得票が上だったのは、保守党と労働党との組み票があつたためだという点に注意を促している。
- (8) ダンディー選挙区の全般的な状況については、Henry Pelling, *op.cit.*, pp.390-391 参照。ダンディーはスコットランドで唯一の2人区であり、ジュートの織物産業が、多数のアイルランド移民労働者を引き寄せていた。ペリングも1906年選挙で、労働党と自由統一党の組み票が多い事に注目し、これをアイルランド自治に反対するプロテスタント系のアイルランド移民の影響ではないかと推定し

ている。ただしペリングによれば、1910年には、自由党と労働党のより明瞭な連携が確立することになった。

- (9) サンダーランド選挙区の全般的な状況については、Henry Pelling, *op.cit.*, pp.390-391参照。この選挙区は炭鉱夫やドック労働者の多い地域であった。ペリングも労働党と自由党の協力がいち早く1900年選挙から始まった例と考えている。
- (10) ハリファックス選挙区の全般的な状況については、Henry Pelling, *op.cit.*, pp.300参照。ペリングも、この羊毛産業と機械工業の町では、もともと労働党と自由党の間に強い敵対関係があり、労働党と保守党との間の組み票も少なくなつたが、1906年に自由党と労働党の協力が確立されて以後、投票のパターンが大きく変わったことを指摘している。
- (11) レスター選挙区の全般的な状況については、Henry Pelling, *op.cit.*, pp.210-211参照。製靴産業の町レスターでは、もともと労働組合指導者インスキップ Inskip が自由党議員として選出されていたが、その死後、「自由党と労働者の間の分裂」がおこることが懸念された。しかし労働党と自由党との選挙協力合意によって、分裂は回避され、労働者出身の自由党議員と労働党議員—マクドナルドが議席を分け合うことになった。ペリングは、レスターの製靴産業が小規模経営であるため、中産階級の影響力が限られ、マクドナルドが1900年の時点でも相当な票を集めめる力をもつとともに、自由党と巧みに交渉する外交能力を持っていたことが、この選挙区における自由党と労働党の成功の秘訣であったと指摘している。1900年選挙にマクドナルドが相当の票を集め存在感を示したあと、1903年には、レスターの自由党组织は、一旦労働党マクドナルドと自由党で議席を分けあうことに合意したものの、直前まで他の自由党員も議席を狙って運動した。David Marquand, *Ramsay MacDonald*, (London, 1977) p.82.
- (12) その危険を悟ったハーバート・グラッドストーンは、結局労働党と協力することに合意するが、両党の協力は、明確な協定ではなく、曖昧でさしあたり秘密の協力にとどめられた。David Marquand, *Ramsay MacDonald*, (London, 1977) pp.78-79